

『溶接甲子園』ことしは最優秀賞を!!

県央工業3年 家坂繁樹さん 初出場の昨年の悔しさバネに

県大会は首席、関東甲信越2位

あとはここ一番の集中力

風間教諭ミスなくこなせば入賞

第三回全国選抜高校生溶接技術競技会「溶接甲子園」が三日、愛媛県新居浜市で開かれ、県立新潟県央工業高校三年の家坂繁樹さん(ニモ)長岡市が出場する。初出場の昨年は入賞を逃した。ことしは首席の最優秀賞を取り、「後輩につなぎたい」と闘志を燃やす。

アーク溶接の技術を競う。各地方ブロックの入賞大会で、業界団体など賞者合わせて二十三人が、大会では、厚さ九mmの軟鋼板二枚を、十分の制限時間内でつなぎ、溶接

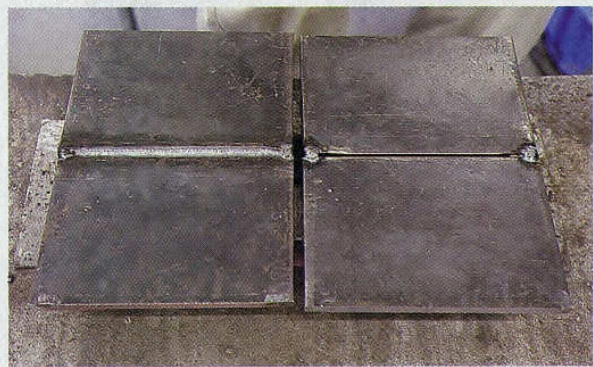


2度目の全国大会でトップを狙う新潟県央工業の家坂繁樹さん

表面のビード(溶着金属)のでき栄えを競う。板側面は斜めにカットしてあり、V形に突き合わせつつなく。表と裏両面のビードを円弧状にきれいに盛るのがポイントで、長さ四十センチの溶接棒(動き(運棒))は「角度とスピードが一定でないといけない」。

大会は年度をまたぐため、出場機会は二回だけ。家坂さんは前回、県大会を二位、関東甲信越大会を三位で通過し、県央工業勢で初の全国に出場したが、経験不足もあり、結果が公表される上位五人には入らなかつた。

その悔しさをバネに、所属する機械工作部で通るかどうかだ。ものづくりへのあこがれから県央工業に入学生な、顧問の誘いで溶接し、機械工作部でフライにも手を出したのが始まり。アークの温度は数千度に達する。当初は溶接に「暑い」「やけどしそう」といった負のイメージを抱いていたが、「すべてを自分でコントロールできる」魅力を知り、必要とされる繊細な動きに「腕が試されておもしろい」と感じた。



溶接のビフォー(右)とアフター



きれいに盛ったビード

進路は溶接関係の就職を希望し、これまでの実績で複数の企業から声がかかっているという。

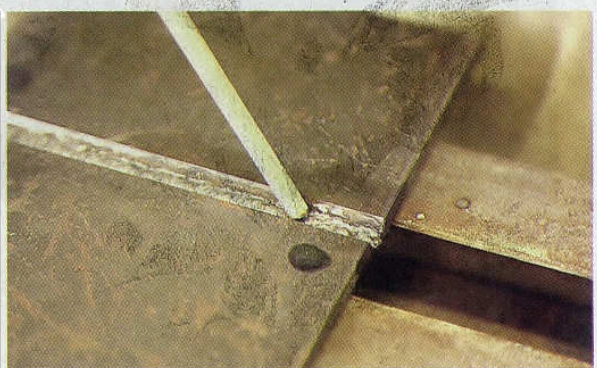
二度目の全国大会。先生や後輩の応援にこたえ、絶対に五位以上に入り、一位をめざしたい」と意気込む。

を重ねた。新潟テクノスクールに向いて専門の教員にも指導を受けた。それらの努力が実り、十二月の県大会では首席の最優秀賞、四月の関東甲信越では首位に一点差の二位に入り、二度目の全国への切符を手にした。

技術的には全国レベルに達し、関東甲信越ではビード内部の仕上がりをもみるX線透過試験で満点を獲得。顧問の風間忠樹教諭は「安定した力をもつている。ミスなくこなせば入賞はできる」と評価する。あとは「二」



作品に日付を入れて練習の成果を確認



溶接棒の当て方